



Title	コロナ禍におけるベトナム人私費留学生の経験と主体性：ナラティブ分析を用いて
Author(s)	Nguyen, Thi Linh
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100476
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コロナ禍におけるベトナム人私費留学生の経験と主体性

ーナラティブ分析を用いてー

NGUYEN THI LINH (言語文化学・D1)

1. はじめに

近年日本におけるベトナム人留学生数は増加傾向にあり(日本学生支援機構, 2022), 90%以上の増加人数が私費留学生である。国全体の平均収入が低いベトナムからの私費留学生は大多数がアルバイトをしながら学校に通う傾向がある(佐藤・堀江, 2015)。また, 非漢字圏地域で低収入国出身の留学生の「働きながらの留学」は留学を学習目的から労働目的に変えさせるなどの問題を招く可能性があるとして白石(2014)が指摘している。しかし, ベトナム人私費留学生にそのようなラベル及び悪い印象を付けて議論することは, 彼らの人間としての考え方, 体験, 多様性を置き去りにする可能性がある。そのため, 彼らの人生経験と関連した学習経験及び日本滞在経験を研究する必要があると考える。

2020 年にコロナ禍が発生し, 留学生の留学経験に大きな影響を与えたと思われる。村田(2022)などコロナ禍における留学生の経験に関する研究は, 留学生を対象に大規模に実施されたが, ベトナム人留学生を含んでない。本研究では, 研究対象上のリサーチギャップを解消するという目的を念頭に置きながら, ベトナム人私費留学生を対象に, コロナ禍での彼らの経験, 経験において表れる主体性を明らかにしたい。

2. 方法論

2.1 インタビューナラティブ

本研究では, ベトナム人私費留学生の体験を明らかにするために, ナラティブ分析を用いる。近年インタビューナラティブを語り手の自己表現として捉えるのではなく, 研究者と調査協力者の共同構築の産物であると見なすようになってきている。そして, インタビューの文脈は最小限に抑えられたりすべきではなく, 他の相互行為の文脈と同様に考察されるべきである(De Fina, 2009)。本研究においては, 研究者である筆者自身が日本に留学し生活する過程を経験した私費留学生であった。本研究はある意味, 当事者研究であるため, ナラティブの構築における研究者の働きかけやインタビューの文脈も慎重に考慮する。

2.2 スモールストーリー

スモールストーリーは, 現在進行中の出来事, 未来や仮定の出来事, 共有された既知の出来事の語りだけでなく, 仄めかすこと, 語りを捉え置くこと, 語ることの拒否などナラティブ分析でこれまで重視されていないさまざまな部分をカバーするアンブレラタームである(Georgakopoulou, 2006)。本研究では, 局所的な相互行為において現れる研究協力者の主体性を明確にするために, スモールストーリーの分析的枠組みの重要性を認識し, 各研究協力者のナラティブを「入れ子式のスモールストーリーが差し込まれている」(秦, 2017: 227)ストーリー (ビッグストーリー) と見なす。

2.3 Bamberg (2012) の主体性の概念

主体性が低い人 (recipients) は被害者のようなセルフイメージを構築する傾向があるのに対して, 主体性が高い人は強く, コントロールができる, 自己決定力があるイメージを構築する傾向がある。

3. A さんのストーリー

A さんはベトナム北部の地方出身である。2023 年 3 月時点, 彼女は来日 5 年目, 都内の私立大学 3 年生である。A さんは来日前, 中学 2 年生の頃から家族と離れて暮らしていた。A さんにもっと良い学習環境を与えたいと両親は願い, 首都にあるおばさんの家に彼女を住ませ, そこの学校に通わせた。おばさんの家で, 彼女は大概すべての身の回りや勉強に関することに自分で責任を持っていた。彼女の両親は多忙で, 子供と過ごす時間があまりなかった。A さんが物事の認

識をより持つようになった時、家族同士が親密で団らんの時間を持つ家族と自分の家族とを比較するようになった。それ以来、彼女は家族との距離を感じ、家族から離れたいと思うようになった。そして彼女の願いが叶い、2018年に日本へ留学した。しかし、日本での生活と勉強を五年間経験した後、筆者との相互行為の中で、彼女が「道に迷っている」と述べたように、将来の方向性を見失っているように感じた。来日当初は日本語力向上を目的に、Aさんはアルバイトをしていた。しかし、徐々に仕事に慣れてくると、自分の成長が見えないサービス業の店舗での労働環境に関して退屈を感じている。また、友人たちが満足している繰り返しの活動による安定した単調な生活は、Aさんにとって、十分ではない。つまり、彼女は日本での5年間の生活が悪循環であることを嫌に感じており、それから抜け出したいと願っている。

コロナ禍における経験と主体性

Aさんが大学一年生になった頃に始まった。コロナ禍の間、彼女の労働時間は短縮し、収入の減少につながった。しかし、筆者との相互行為の中で、彼女は労働時間削減によって勉強する時間が増えたと肯定的な意味づけをしており、そこからAさんの主体性の高さが浮き彫りになった。同時に、コロナ禍でAさんの両親が失業し、彼女の学費を借りる両親の姿にプレッシャーを感じていた。それ以来、彼女は両親に学費を求めたなくなり、フルタイムで働いている友人たちから借金して徐々に返済することで学費の問題を解決することを選択した。Aさんはコロナ禍の悪影響に直面している時に完全に受動的な人間であった。しかし、そのような受動的な状況の中で、親が自分のために借金していることを目撃した際に、ストレスを一時的に和らげるために自身の問題を主体的に解決した。つまり、彼女が学費を支払うために友人からお金を借り、その後徐々に返済したということは、当面の学費問題を解決するための一時的な解決策であるが、彼女の学費のプレッシャーを完全に排除する方法ではないと解釈できる。そして、彼女はまた、良い友人たちに対して幸運と感謝を感じている。相互行為の中で、コロナ禍に経験した消極的な出来事を前向きに意味づけた人物としてAさんは浮かび上がってくる。しかし、その前向きな姿勢の裏には、彼女がコロナ禍中、極度にネガティブに感じた時期があった。

最も消極的な時期

コロナ禍の間、彼女は学費のプレッシャーに加えて、学業成績が良くなく、様々な不安を抱えていた。その極度に不安な状態の中で、彼女は学業成績の良い友達と自分を比較するようになった。友達との相違点を受け入れられず、自分自身のアイデンティティについて曖昧な状態に陥った時にその不安はさらに深まった。それだけに留まらず、生活の安定を必要としているベトナムでの親しい友人たちと自分自身の相違点にも不快感を抱いていた。そこから、Aさんは誰ともコミュニケーションを取ることを望まなくなり、いわゆる自閉症のような状態に陥ってしまった。

この状況は、彼女が日本語学校時代の友達に悩みを打ち明け、有効なアドバイスを貰うことによって初めて克服された。アドバイスを受けたAさんは自分自身を冷静に振り返り、学業成績の良い友達やベトナムでの友人との相違点を少しずつ受け入れていった。彼女は、自分のことだけでなく、他人のことも考える必要があるという自分を幸せにする考え方を学んだ。最後に、Aさんもコロナ禍を経験した後、家族に対する意識や行動に大きな変化が生じた。コロナ禍の間、誰にも打ち明けられない多くの不安を抱えていたAさんは家族と接する時間が増え、自分の悩みを聞いてくれたのは両親だけであると気づいた。そして彼女は家族が何よりも大切であると意識するようになった。筆者との相互行為の中で、彼女はまた、過去に親不孝であった自分に不快な気持ちを表す表現を使用し、現在の反対の立場を明確にした。この立場の対照性は、彼女が3月8日の国際女性デーなどの特日に母親に願い事をするようになったことなどの具体的な行動にも表れている。

4. Cさんのストーリー

Cさんはベトナムの北部の海岸沿いの省出身である。Cさんは2016年来日した。2023年3月のインタビュー時で、Cさんは東京の私立大学の三年生であった。Cさんは来日以来、学業と仕事に追われている。コロナ禍の前は、彼は主に居酒屋のアルバイトで高収入を得ていた。アルバイトに関連して、Cさんは唯一直面した困難が言語の問題であると感じている。Cさんは仕事で同僚とコミュニケーションが取れた後、仕事が簡単であると感じる。Cさんにとって日本での生活は、給料日以外は灰色で、仕事に行くことと学校に行くことのみを巡る悪循環のような生活であった。彼は日本での生活について話すとき、彼の人生は面白くないという観点を上げた。Cさんは、人生に対して否定的な見通しを持っていたにもかかわらず、コロナ禍前の時期を「コンフォートゾーン」であるとも暗示した。その「コンフォートゾーン」で、Cさんは高収入の仕事に就いて安全を感じていた。

コロナ禍における経験と主体性

コロナ禍は彼の「コンフォートゾーン」を壊した。コロナ禍において、Cさんは悪い出来事を体験し、「このコンフォートゾーン」を再構築するために多くの困難に直面した。具体的には、コロナ禍が始まった後、彼は仕事を失い、その後新しい仕事を見つける過程で相当に苦勞した。コロナ禍の間、Cさんの主な収入源は自宅近くのとんかつ店での仕事である。また、彼は佐川急便で新しい仕事を追加に探したが、疲れすぎて辞めた。その後、彼はまた夜勤の弁当屋でアルバイトをはじめた。そこでは、店長と意見が合わず、後に疲れすぎてその仕事をまた辞めた。筆者との相互行為の中で、Cさんはコロナ禍において二ヵ月分の家賃を滞納し、家主にドアを叩かれたスモールストーリーを通じて、経済上非常に困難であった人間であるというセルフイメージを構築した。彼の両親や友達には彼を経済的にサポートする余裕がなかった。Cさんはコロナ禍について「最悪」な時期であると感想を述べた。コロナ禍中、彼のすべての計画が破綻し、何もできなかった。そして、彼はコロナ禍中の自分自身を「お金が切れ、愛が破れ、人生が荒廃する」完全に倒れたかのような人間として描写している。彼はコロナ禍に対して否定的な見方をしただけでなく、コロナ禍前に獲得した「コンフォートゾーン」を失ったことに対する遺憾の意も表した。コロナ禍後の彼の生活は基本的に「悪循環」であった。コロナ禍後の彼の生活はコロナ禍前よりもさらに忙しくなった。彼は仕事とインターンシップに追われ、学業に集中することができなくなっていった。

5. まとめ

AさんとCさんの両者がコロナ禍に困難を経験したことがうかがえ、それぞれが直面した困難をどのように乗り越えようとしたかによって、主体性が表れている。しかし、Aさんの主体性は、コロナ禍の経験に積極的な意味を見出し、筆者との相互行為を通じてそれを表現した点、と現在の生活の悪循環から抜け出したいことにも現れている。一方、Cさんはコロナ禍の経験を否定的に捉え、コロナ禍以前の生活を「悪循環」と見なしていたにもかかわらず、その安定した環境に未練を抱いている。

参考文献

- Bamberg, M. (2012). Narrative Practice and Identity Navigation. In J. A. Holstein, & J. F. Gubrium (Eds.), *Varieties of Narrative Analysis* (99-124). London: Sage Publications.
- Georgakopoulou, A. (2006). *Thinking Big with Small Stories in Narrative and Identity Analysis*. Narrative Inquiry, 16(1), 122-130.
- 秦かおり (2017b) 「スモールストーリー」 鈴木亮子・秦かおり・横森大輔 (編) 『話しことばへのアプローチ』 (249-252), ひつじ書房.
- 村田晶子 (2022) 「コロナ禍の「日本留学」—外国人留学生の孤独とレジリエンス—」『多化社会と言語教育』2, 1-15.
- 日本学生支援機構 (2022) 「2021 (令和3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」
https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2022/03/date2021z.pdf (2023年1月4日)
- 佐藤由利子・堀江学 (2015) 「日本の留学生教育の質保証とシステムの課題—ベトナム人留学生の特徴と送出し・受入れ要因の分析から—」『留学生教育』20, 93-104.
- 白石勝己 (2014) 「外国人留学生受け入れ促進 その課題と具体的対応方策—海外直接入学許可の戦略構築に向けて—」『ウェーブマガジン留学交流』45, 17-25.